

X

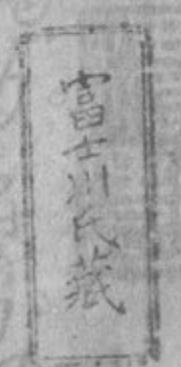
16

F

オ-10

490.4
Or-2

No. 3221
12 0' 16



A82

和葉醫學の序



夫。葉。之。雜。丸。下。殊。竭。力。君。勇。取。
至。家。深。其。所。深。乐。於。省。夕。之。安。
博。知。深。深。深。深。深。深。深。深。深。深。
宗。施。施。施。施。施。施。施。施。施。施。施。
思。赤。之。云。醫。之。形。之。又。病。用。楊。也。但。
家。枯。血。之。也。失。清。經。功。收。清。為。清。河。為。
系。楊。敷。包。之。歲。自。取。之。情。何。為。



吉士川文庫

785

記。奉时。之。字點。字。而。以。廿。薦。於。陳。
之。吉。翁。男。多。子。家。而。淳。昌。考。父。
之。翁。也。累。在。少。子。祀。之。故。祀。之。
扶。濟。此。士。深。至。李。年。裁。乃。翁。之。
日。旦。而。稅。據。之。之。字。嘉。以。之。
游。乃。山。從。翠。心。本。創。初。之。未。采。
卖。而。化。金。保。堅。心。志。勝。於。晚。宵。

多のふほれ、雖、志、參を、ち、在
あ大人、筋、ふ、火、と、も、は、紙、お、就
は家塾、以、て、考、究、が、お、ほ、持、生、就
要、業、机、ひ、じ、士、業、為、從、父、上、而
廢、る、よ、初、ふ、社、務、本、行、事、業、
充、足、孤、星、等、等、其、業、業、乃、之、
也、而、以、等、于、所、生、至、等、等、于、所、生、
否、不、以、等、于、乃、業、業、雖、是、然、

和蘭醫事。問以之。有筆。慈爾。愛。醫。病。而。余。少。小。後。清。黎。醫。書。鑒。麟。翁。居。嘗。嘆。曰。我。瘍。醫。之。術。而。封。藏。合。鑑。以。博。有。至。者。而。隸。奉。邦。近。世。以。是。名。家。聲。傳。等。太。率。自。嶠。陽。象。胥。其。為。說。也。拾。和。蘭。之。喙。餘。補。以。漢。醫。之。論。說。所。謂。續。續。以。狗。尾。者。亦。奚。足。講。哉。不。若。親。學。和。蘭。之。言。以。

歎吾儕ノ孫子豈可不戮力而從事於斯

哉ノ此鄉事ノ事ノ幸ノ也ノ達學者ノ譽ノ鑒ノ

寛政七年正月春三月ノ日ノ九ノ其ノ書

道始ノ城義熟東奥ノ大槐媛ノ謹撰ノ合

推其ノ所ノ之ノ小體ノ之ノ書

同社被ノ其ノ鑒ノ田ノ目ノ本ノ蘭ノ醫ノ書

曰ノ卷ノ蘭ノ醫ノ書

者ノ碑ノ刻ノ西ノ境ノ紫ノ邱ノ記ノ稿ノ譜ノ鑑



和蘭醫事問答

附言ノ是夫醫書與效進述種生業矣
一此書ハ建部故道二先生往復ノ書簡シテ
當時門人塾中ノ錄ノ名々テ蘭學問答或以
一瘡醫問答ト稱余顧呴此書ノ論說原テ和蘭
瘡科始問難端ノ起ストイヘ氏然焉テ編ノ大意
一醫流人宗源ニ係リ故今改題シテ和蘭醫事
問答外云

俗牘固ヨリ旁點ヲ加ベキニ非然氏門下ノ幼

蒙初學ノ為間此ヲ施スノ識者ニ在テハ則
為蛇足矣

一和蘭語上不混同セシマ恐故ニヒ如此勾
畫ヲ設ク鑑賞ノ有ムハ勿矣
一此書冊ヲナシテ後辟門人及書肆屋^{書屋}謂フテ木
上セシ突然氏ニ生敢テヨレヲ許サズ而笑
一音籀々タル小言豈何ツ不朽トスルニ足ヤト無
幾建部先生老テ奥ノ地没ス杉田先生ノ業六
味日月^{日月}隆盛ニシテ從游之徒如雲千里負笈

來集リ社盟ニ與ル者日一日ヨリ甚シ先進ノ
塾長必ス先ツ此書ヲ後進ノ徒第三示シ其
レヲシテ斯業ノ來由ヲ知ラシム或ハ先生ニ此書
アルヲ傳聞シ來リ請モノ少ナカアヌ而彼此傳
情播轉備シ啻^止騰寫ニ勞スルノミニアラ^裏紙葉散逸
阿原本ヲ失フ^ト數回ニ及ベリ且ツ傳寫^ハ際謬誤
モ亦少シトセス故ニ余憂之^ト久シ因テ屢々上梓^{セニ}
有^シ請フ然モ先生許サズ其言モ^タ如前余頃
然竊此ヲ家兄清菴^ニ謀ル^{兄姓、建部名由水字}亮策父祖ノ號ヲ襲^テ

清菴ト称ス
奥一關住人兄固ヨリ其宿意アルヲ以テ深シ此舉ヲ

欣躍ス因テ相俱ガラ戮セ考許シテ強チ此身

剖劂附シ以次家塾ニ收ムト云々勸ムヒ其勃
寛政乙卯夏六月

杉田勤士業識

博業來復同味之研學坐此舊
鑿石先至丸母舊地鑿並杉田先生示其
來集印隨筆學禁游一百往如惠多蒙與之

和蘭醫事問答卷之上



清庵建部先生問書

合義

阿蘭陀人年日本未來之外科ト云覓之ニ遺斗ト云覓之

阿蘭陀之內科、醫者ハナキコナリヤ

阿蘭陀ト云ヘ風寒暑湿產前後婦人小兒、病大半

有マジエトベク膏油藥、類カリニテ、療治大テマダリ

然ハ内科ナクテナラフナル日本ニア蘭陀流ト称シ者

皆膏藥油藥類ガリミ^ミ腫物一通^リ人療治ミスルト不
審ナリ長崎奉行へ従^リ往^キ鎗持八戻挾箱六助モ一年
彼地居テ帰^リ外科ナリテ八安六齋ナド名ヲ付キ阿蘭陀
直傳ト称ス内心得ガクキ也長崎へ往タリ氏阿蘭陀醫^シ
弟子ナリ療治ニモ見習彼國醫書シモ習ハシニ成
ヘカラズ但シ長崎ヘサヘ往ケハナルトナリヤ

阿蘭陀本草ノ書有ハ聞及タレニ僻邑^{イナカ}ニテハ見ルコナラズ
右ノ書ヲ見ハ艸木ノ氣味功能氏ニ本草綱目ナドノヤウニ
知^ル開ナリヤ車問答卷之二

阿蘭陀醫書モ多^シ渡リタルヤ

右ニ西ヶ條再起上諸名家御質問委^シ書付御申
越され外れ致度此^シ外阿蘭陀醫學ニ事付テ
年來不窺^シ事多方々^シあ久^シての而^シはか跡^シ
實^シに此^シ前後猪飼アシトシニヤ失念も可^シモ
足老廢^シアシト再會^シ勤^シ難^シ第^シ是^シ無^シ也
本草書ナリ名は多^シ紙^シの多^シ黙^シ有^シ外科者流
今日本^シア蘭陀外科傳書モ八卷書十二卷書新傳の

尊之家秘とすれど阿蘭陀醫之著述は既に通詞と
頼て色の事を聞書よどむるより又ゆゑや何よりの明醫
す聞てもえ来醫事いかざら通詞の口ばくはくるゆゑ
か日本人と阿蘭陀人との稟賦の不同がよく爲る其土地の
寒暖の違ひ衣食の異なる事をも辨滅染色性も聞る
事なれば阿蘭陀醫と已う別ひそれなり筆計を口と傳せ
言ふ筆あめの書ふる八巻書十二巻書やまとり小傳
書とぞりあるとひりてあよつて何の書ある間
傳の後遺れを承りて唐の醫書の外科の部

按集を病痛を集合するものと見ゆ。や西真の阿蘭陀流
奇かるのよへきまへー

阿蘭陀の文字は日本のいろは回文は音計字義、并とそひたと
阿蘭陀醫書を能みて初の義理と彼地の風俗事跡を不放と通じ
今之を累々特言俗語を以て時の方言も更に國材里の
称を取て病名も醫者の称す所と民の呼ぶ者と
古今称呼の遙有若や日本の阿蘭陀流外科甚は清く名
家傳と称し吟味せむ事不審也愚老阿蘭陀傳書空
いわの捨立部取集をさるよ藥名いろへ遠い有聲

白蠅をヘツキワスヘツテラスヘトルルアル乳香トトウセスドウ
リスラリミニヒシイライロアーステキスステラスカラメイタ如此
白蠅乳香ニ藥の名數多可考之異名數多有之
國々村里の方言古今称呼の邊雅名俗称者一ノ資料者流傳
書以秘一他不傳者も不記家傳之号博く以せざれば
何足矣何を取るや如何にえれ阿蘭陀の醫書といふ
をのと傳授せし膏藥油藥けをちひそれと一流と云立
チルがちるヘ阿蘭陀の醫書渡りて彼邦の國字言語
を知れ用ひ立るヘ唐にて鳩摩羅什モジウ佛經を翻
傳來し仙臺は傳小其流法ハ同藩は殘是木多吉左衛門

譯ナラシム日本ヨリ學識ノウジキ人ヒト生スル阿蘭陀の醫書を
翻譯ハタハタシム之傳字は多くひ真マサニの阿蘭陀流アランタ出生スル唐北
書シテシテかくカク外科ガイケの家カミ之ノ外婦人ガイブンジン兒科ヒヅケの妙術ミョウジク也
也ト其ハ抄ハシマ天正年中毛利弟ハサウエと入スル南寧ナンニン之ノ彼地ヒヂ
十七ナナ年居リ火術ヒツク鉄炮テッポウの妙法ミョウジクを傳ハシマ歸朝カムコウの後タリキ木民部モミブ改
改名ハシメル其ハ流フウを櫟木流カシキフウといひ種ヒメの妙術ミョウジク名譽メイヒをハ
ハシ後タリキ加州カシマ仕官シガム其ハ子コノ櫟木又モリモリ家カミ相續シヤスル可
聞ヒム火術ヒツク鉄炮テッポウの極カタ祕傳ヒシツハ矛マホ井上源次イシタケ也ト人
傳ハシマ之ノ仙臺センタウは傳ハシマ其ハ流法フウハ同藩ドウバンは殘是木多吉左衛門

と京へ傳て毎比類妙術と極むせば放火といふ根元此火術も
ゆるほに又それより前のことある年伏見河内條端刀を
以ひ人をも南寧へ渡り婦人科醫術を傳へるゝ奇効
妙驗者。由其醫術の法是も仙基より中日送味
とりより家口付もあ人共は日本一家妙術の祖とするだり。少
付のあ流せよ唐の書ばかりは一家とするなり。阿蘭
院流の外科計、阿蘭陀名衆へすれば内にかえれ皆
唐の書より抜出了て集合傳會した。慨嘆す。ま
のむかたり夫婦の科のや役の極なり。内科の先へまづ

す。後獨造を行ひめ持出來るが爲念。極有る。や
唐宋の方あるも瘍醫疾醫卷。明の陳實功清の祁坤
之輩各擇著方として獨歩のゆききの書面の通焉既古
人の悟る内之症或不及其外外之症則必根守其内也
と有る。膏油藥油藥け。外之貼。守。有る事あり
夫の藥と身ひきすし。内科、腫物の寒熱。要實。切
々如ぬかみ特。相候。仕無能なる。ひれも惡意
地。うち内科。外科の言葉。不。用。か。ぬ。よ。我まで
張。ま。病。と。説。く。事。多。し。不得。已。外科。内。あ。を

まれ、利き射りあめの内みを薦すと又惡性な者を
詠詩を以て聞。丸夫のはれさま、嘔恚レーリ盡シテせり
自らよ修魔を破る事やと思ひてやがて外科一家エイを
せしめ、能く、すみどりの根ハルニシをすすり、今日迄解魔法師ハラハラ
賣ワタスを坊主同前コトノヘにて神する。而して佛ブダもあへ、天台もあ
はへ、真言マツモンもあへ、御幣ヨウヒを振フジて真言マツモン法器ハツキを奉スルを
着スルして中臣後ミツチヒを唱へ半上首下ハナミツシタの渡世業ハタシテを業ハサウエを賣スル、
術ハツと鬻スルき一ヒと慕ムカシ。然ハシメて殘念ハシメを極ハシメあり。治志ハシメ事ハシメ也
道心ハシメ切ハシメへ爲スル。何よりは此業ハタシテは彼の害ハシメで

○
何の宗旨ハシメもすく人ハシメとア碩學ハシメ知識ハシメの高僧ハシメを賣スル
主坊主ハシメ多々悔すハシメを俗人ハシメもとひ得ハシメる人ハシメ甚ハシメて多くす
者ハシメりふさり。今ハシメの外科ハシメ右ハシメの肺ハシメたハシメや婦人ハシメ小兒ハシメ眼科ハシメ
科ハシメ右ハシメ家ハシメとなハシメ。内科ハシメの指引ハシメは浮ハシメ皮ハシメ獨ハシメすハシメよ外科ハシメ
獨ハシメ道ハシメを行ハシメ。ハコ病ハシメを率ハシメす。也や早ハシメ竟彼ハシメの安六齋ハシメ
すんといハシメ、捨持ハシメの像或ハシメの傳ハシメの科ハシメ。三鷹松ハシメ三星ハシメ同然ハシメ。膏ハシメ
藥油ハシメ藥膏ハシメ貼ハシメ。一年長崎ハシメより阿蘭陀アラナ院人の於熱ハシメ解ハシメ。膏ハシメ藥油ハシメ遠見ハシメ。江州ハシメ將ハシメよ長奇ハシメ咄ハシメを臺ハシメて直傳ハシメしゆと

外すから、一療法を居る内は合能けま、後度
方へ往來をひずくも、未だ無事か内科の尾へ附て、是と
たゞ自家の科またもあらざるなしに爲矣。壯年の
頃から夫を娶りしもの阿蘭陀醫書をさる事、即ち那
食えうとも誰でも詠説する所、向阿蘭陀流
を止して唐流を建立して、さるものと思ひぬき、自我作古
ほどの墨量、即ち勢いよく月と遙くぬ風、嫡子三者
達する江澤又聞、汝何ぞ江表より高識の人を尋此
事か謀きと命じ、ある程命を先づて死を思ひ、老ら

窮早齡、傾きの氣力あるむ日周の車とへゆきとするが、
あるよ、傍晝、弱年なりめゆともすへきはしゆふるよ、
我死まる後なるも、何卒此志を継ぎ二家とせしと教
なり江戸表紙、庶生事され、先きを追と達したる
人、又阿蘭陀醫書を詠説する人あつて、是を
私の書めしに速々にやかうの大業、都會の地
主豪傑の人起き唱出しき、未だある事なき、阿蘭陀
日本へ来定し始まつての頃すら、年代を記されず、二百年
前後をもやうんまつて、今迄のるよ、阿蘭陀の醫書が缺

御多羅の人民の手紙ある。而も此は今頃、號譜の書ある。
云々か及多鄙の地に居て、之等をより年令ぢう事なり。
初入阿蘭陀の船に人數夥斐、其女由を以て、船頭を
水金樽取の額高人を以て、夫の雇を船中一通との廢
治を以て、廢せざる醫者より名へ。善手筆なり。且世
の廢すも馬奴船脚ハナカラセンドウと云ひて、方なる者にて、ア
蘭陀モモ貴从公子少司ナシキサ者也。後より者な
ば、彼地モモアヤミ下モ醫者なり。又れ持參ハサる
膏藥油藥の功能を口傳せよ。又聞書より、阿

蘭陀傳書と号。而も殊未下し。不秘。又金匱玉
函ハラタケ。又首より極念のゆかせ。又やや一貴从
子播神の票受の薄すと、豈天野人の票賦の厚すと
療治の遠有筆。ちる。藥方并列のあす。又れ、療
治の術を名づけ。減汰手は膏藥と貼也。又ニ。又
婦人小兒の治方。又遠有筆なり。是追思也。又。眼科
科の筆。不委少一計書。筆もれはく。唐流より其
外。云々言ひて。委安阿蘭陀傳書江戸京玉有へ。其

田舎よすし故よゑ老、不活仰も居るや天正以前の毛利
少、中條第力うどひの大器量の醫者有て蠻國へ渡り
妙術を傳へ來る者は日本の大重寶とする事も有へりしに
耶、蘆宗の禍もと、御割林もと成ざらむ。嚴命
ありて阿蘭陀の醫者者と云ふ。至寧日本の學力の人々
亦、仰は彼地の醫書の翻譯を來ざりし、正真の阿蘭陀
流も成就もとあまざ今、止ともなぬ事より何人不及
是、水痘流外科ひま立する外の事形一其の
流と云ひし唐流もとを鄙びずれ、利を得る易い
流と云ひし唐流もとを鄙びずれ、利を得る易い

すと、例の悪性者、説教するが足らず、一生解魔
法師曰く、持果るな。へ江戸へも二十五年生れ、今
の風、めりぬるゝまでかの人に、皆泉客なりぬる
ゆきもぬるよはせめて二十日、前ヨリアラカ付き彼地
見度く吟咏を盡り、今は阿蘭陀流、出来まじ、唐流
外科なり、達さず事、成へば、日暮途遠一めのとも之
を以て耳目へ遠く行歩へ不自由なり、何處へ可往む
な、せわ語の趣を以て、愚老、志を隨けぬるよは出

候折々万事伊ニ様松基へ御上合仰猶存遇事
左近色々取集め長江心ニ此か失念す。折々左近之托
の心事。忌老、惡筆を以て。謹由是又落空多乃乃。書直
モテ申明日。死ノ事も此趣事御世活有。之。是。恨
なく。承依。乞言。印存印章。以。進。坐。要。事。
明和七年閏六月十八日

奥州一關

建部清庵



攝
鶴齋杉田先生答書
清菴建部先生和蘭外科者流。像。不審。遂。一。并
見。仕。迹。以。奉。感。心。也。天涯。相。隔。脚。二。面。識。也。年。少。往。來。
浮。實。吾。黨。之。知。已。年。載。不。奇。遇。之。奉。存。而。存。以。
趣。應。御。不。審。左。相。遇。申。後。之。本。行。藥。外。科。和。
和。蘭。人。年。と。日本。來。水。隙。和。蘭。人。年。と。日本。來。水。隙。
外。科。と。小。火。之。而。科。と。小。火。之。而。科。と。小。火。之。而。

類奇法異術唐日本と遠い事多滿在取見館於
の八歳狹翁の六助、類長崎へ行帰て阿蘭陀外
科と称取れども藥賣曰猿の者若草の論說と興取
者又年少種水

和蘭本草之序

是ハヨリスケヤ人著取司ロイトガッタヒトア大威の書拂
達取並ヨアアテ公ムニチナクチヤ人著ルアンドケウツ
セ其外「空井ニシ」ヒヤ人集取本艸は新名の寫真圖
之書御存取何事よ土産釋名氣味切脉ホ委説

育々又禽獸魚介蟲を況キリヒ書不司スルニ事
人著取大部有々小金石と況申ヒ書ハ「スエヌテータ」マヤモ
達取右諸書所説を傍れ、假令ハ蟲魚の類モハ其底附
形狀異同モハ辨有々自國の產物の事ナリ通商
よしに程の四方万國の度あ近も遠も集有々其説の
鴉密威事本草獨自杯の及ヒ者又年少種水
醫書多渡ヒ哉、御不審

内景を況水書ヨハ

○コムス○ブランカールツ○カスハリス○コイテル○バルヘギン

○ハルヘイン何人
の名

右の諸士著水類芝近見當とい書數十部

治療の書

○ハーネスト内外醫書○ボヰセシ内科の○ブカニ上同

○アーベルシスハーレ醫家二孫、外華集成の書な○アホテーキ内外方彙之書

○ウヰナカトカムル内外醫方○シヨナル林イスホウデヒトキ法集成の書

○ワアペントカムル内外醫書二通○ホウタルノ外辨金鑑其外觀の同

卷

右え類醫家と興りい書計も夥多御座レ志外題記不

半假是又御望レい者追る書付入御說可申承

日本是和蘭外科傳書數多有之本之條

御不審御尤モなひ如酒不審皆和蘭方テ膏藥油藥レ度の外科書の論況を加へ著述致水者と相見ヘ東水漸摘林流を取扱於金瘡レ書近來京師レ伊良子氏外科訓蒙圖彙と外題レ板本レ出レ申レい者是右アリアンドルシスハーレと申レ書の金瘡レの部計少く和解レレモ少く之種レ去其

内レ又他の作者の用意レ一車書モかレ申假令く和蘭書和解レ施申レ然葉先レ往位和蘭レ車通レ書是近

見當不申叶候ト今橋林流も唱ヘ人の療治並仕掛の書と申い類世間並の和蘭流も御存此類皆一家の書とも申得者宣ても申候事御説も通ひ真和蘭語と申がれどもと奉存承和蘭文字ハ日本のいろは同然の體

御不審ト通和蘭國字ハ日本のいろはの通音付モ一字の義ハ無ク文字三十六ニ三ノ數字九合モ無數三拾五有二ト書體ハ「ル」「タク」「テル」「キ」林連敷體御聲得モ無數遠矣又申候文書文字を並ヘ二語を混用ゆを

「ヘト」サ申日本の俗名はアヒトヨト車エモ酒庄此文字は發明候て言葉書古言葉又通トシテハ今リヤ間置の御不審酒た少在取是者先和蘭譯家後日用の説話と竟へ或ハ易ニ書写讀寫ね和蘭書二字彙の如ク書有キサリ「ハルマ」「ハシナウト」ロケーハ林業ト人の著ト申ハ「ウタヒテナブック」と書多御社申是トドリテ一語ニ工夫を免ケ申候筆畫トテ暁解シ年月以重得モ自然也言葉數を幾ヘ股に讀馴成得志風俗事競近も相加ト申其書ハ何の為ニ澤山有モ哉と

御不審も可有り度此地方の風俗諸國の言葉近
と莫へ其國の術語をも学び得て者より異邦の辞々和蘭
語と通譯ト和蘭語とは異邦の語々注い書ふて
二通ヨリ以て対照其通譯を熟習ひ得て言葉等を
複合考合水清者以て又相合リテ又言葉は風俗等方
言等も前有の御不審御元奉承者これ天經或問
等の書も有て通徳世界を四ツ分ナ一亞齊亞ニ亞弗
利加エタ歐羅巴四アヤ墨利加モテ其亞齊亞弗屬皆本
唐朝鮮琉球等言葉ハ右および清を文ノ同文ナフ

漢文書也得此ホの國ノハ通ト其下ノ和蘭拂郎
察等の属ノ歐羅巴洲中ヲ通り言葉を羅甸と申准
是彼方の雅言の類也是モ「ホールラテシウラルデニテツ
クヨアヒ書モ穿鑿破ト得モ相合リテは司テイシ
セヤヒハ彼諸國の語原モトイテ醫書なども皆先
司テイシヨモ本名を書き直其下ノ國語ヨモ其名を破
者のみ支那俗を能くアモリ其外異邦の言葉ノ文也
を集ヘ書は「ウールドンカット」トモアシテ存ヒ是モテ破
参考ヒ得ヒ能クアリ

是まで日本は傳來まし和蘭流み科書藥名一概は筆マ
由添不審滿たまひ取是よ今迄和蘭流も外科和蘭
字も文有無「ラティシ」も國語も其分間任せて書する
ものか一向其言葉をかぬ事滿在以甚上日本の俗名も
何の氣もなく和蘭語を書いた事が轉音不少ぢる
日本以外何等の國も二合三合半湯より額と言
葉多リ日本より日本にてハ漸合羽土巻杯の類のこそ
ウズセ一財彼國の言葉が大ひよ遠じい事かといづ
考へめ方より大糞も燒き薬と云ふ相成り候へ
ハ

焼酎の事を和蘭語「ラシドウエヰ」とゆひ候、「ウエ」乃
二字を一つよ寄せて書け得て自然よ音韻協調ゆいあ又薪
の事を「ブランドホウト」又火事の事を「ブランドホイス」「ラシド」
とハ焼る事「ヰヰ」とハ酒の事「ホウト」材の事「ホイス」と
家の事「ヰヰ」の趣より推て彼國の言葉の意味酒燗
アモヰヰ水お又是迄傳來い和蘭藥名不分明御座候
テ社取金体「ストホウト」と「ストホウト」の寫
高「ローフ」たちものを「ドロップストホウト」とゆひされと唱へ

語り「ゼホトウ」林傳来いを聽きよしや此れにて治
施ふ可也外ね

當世より和蘭外科と呼ぶ醫者本來和蘭の醫書
を不傳授其間書を傳書と称し已家より秘し家傳
之號ノス膏藥計貼四つ不掌文有ぢるも内醫の
指圖計を更々自然之手の指すが外せ事殘念也
是れゆき處を極すゆゑ我様も年來漸回忘却して
前述も和蘭學より來かに似像唐流の外科と存被見
考の外科書との如くアリヒキ何の書も見不づく却る

外の療法今り少和蘭外科者流の方勝き少推
すより全財上代周の頃ハ醫の道西く疾證瘡疎やか
以て世も戦國が經有志士ハ二國の主と可成と心
急醫者林ヨハ成る人多く柔弱者多病の者醫者
宋又は浩るまゝ道家と混じ内外醫道大々裏微一割
外科ハさざなき業也猶更為めん鮮く内醫の片手
足らず成る唐の外科ハ絶頂圓熟の事とす能く深く
宋元の頃より一家と唱へ千金方外臺秘要林よ取
けさて外科が建立しまふのが内醫計自よし

外物の如き下すに成るを以ては其の外の事す
唐人の癖とて滅多無はず名は増一病つと分ひれ
療治の規矩立不すいれども此去因の事ハ唐經籍
に傳はれ日本へも和蘭の膏藥油藥系其術
を少く傳りてをまよひし家との秘方薦ひ奉とおゆす内
より唐の書より又日本の妙藥をと一つすと又ば薄文
ヨリ日本一流の外科建立の歴と弱年の頃より心急病
つきりとすけ簡約ヨリ根太腫物吹出物といふ事に
多寡の意より部と分ひ改むる唐人よても日本

流の外科考は可申る著述を相企草稿七八巻も出来
仕於第一卷之卷首に趣意

瘡瘍之名極多矣而癰疽居十之七八也如發脇
發臂者曰脇癰臂癰發腦發腕者曰腦疽腕疽千
金方曰癰疽發十指也而發背其尤者也瘍鑿之
業莫大焉歷代名家癰疽則分發背為一條而庸
輩或惟以發背者名癰若疽焉等是生一體之瘡
腫而陰陽輕重之分也何異而治之孫一奎既先於
我曰五發疽通治又陳實功獨言癰疽發背之

治耳蓋取仲景立方於傷寒而雜病皆準焉翼
私淑而傍之廣幾其道易簡而使從吾遊者易
知易行也

集驗方曰癰疽之名雖有二十餘證而其要有二陰
陽而已 以下畧之

余仕友人の語一言半句よりも心を徹するに接り
あつ免治すと付病の變化の従ひ術も附申いぬ
五十年以來四十九年の経を知とやらニニニ年已前
不圖前際中止ムスレモ人著置か内景の書

手入闇計をやうひゆ蔵府の形脊骨の數を算るを得
居候達は所れ不審な羅もトテ刑餘の屍と觀藏
主故め人有て是る幸とな其事致同伴系見申候
得て臍府骨筋漢人之所說大遠也外加和蘭國
ヨ合ハ得て滅々鏡よけいねす今遠年少寐依て太
噴拂仕事中津侯も侍醫前野良澤トヤ人肉科也
和蘭學士志有て仁少於外此人々先年蒙 台命和蘭
語通譯滿掌を成す本豈陽先生御門人厚源君也
滿握述く書御傳を成す有是よりて熟後時記を改

數年之後漸々和蘭醫藥理解既已猶不審之度者
由是長崎表也及越譯家了得其意而一反復
未始持異和蘭醫學也惟是故而此人也亦有
又曰病中川淳庵之者內科よりは物產と以
中川景又和蘭學より志士のうち相共も右良澤を監主
ヨリ以て字引一冊計六經を讀むる人所と並んで有
平生念を以てお寄破吟味ひ實不貪者心也
アリテ以てある猶又着實の味足り皮膚之處
氣概有之枯骨を尋ね内景ハ死者生者の如モ可

有之在和蘭書より有之は乃生なり禽獸を剖也
アリテや和蘭人所説益相合リト肉ハ漢人猶存後
所大遠ヨリ却ク甚速く滿府以譬へハ漢人の説天下同
月阿リ人ニ立目ありと理ハ高遠ニ聞ヘド得サわばアリテ
理ハ窮不アリ和蘭人の所説云々眼といふも勿論
其次ニ至るを又アリ次ニ雞卵の白味の如咸水アリ其
水よ万物の氣も水の水よ主體もアリ事
千里鏡等向ト理ハ見ヘド又古ハ骨も非和蘭
語トニケヘトニトニ真ニ見ル所あ後年活版依考

吸得生婦人の乳も肉塊也舌も肉塊なりに舌の自在
にて乳も不自由なり舌の自在あり肉より骨あらる筋筋督
乳と骨筋が筋不能等や先づ筋の類其筋とニ千金來
所失説也依りて不及如鷦摩羅什以多見政翻譯解
體新書と書五冊出来いじいす校合相成不アレか
上木より近い生耳可ナト其約圖被出来れるハ少也
甲戌是より大筋通瑞指參考本此れ御序より上代
を委々見ゆると考へ今古に剖解考合ひ得リ用
徳ねち鉤経宣教所あくへイ横骨者神氣所使

主發舌者也し頸彼是役符合する者有みて終る
後世も疎漏の多のを云張景岳本アノ魚骨と云
脊骨と定横骨本も自己の見より之は一横骨即喉
上軟骨也下連心肺故為神氣所使上連舌本主舉發
吉機又十四經絡發揮及註證發微し類は皆項骨約
有三椎といひ又名鍼灸聚英膽經懸鐘穴一名絕骨
尋摸^{スル}尖骨者乃是絕骨^{スル}說り今直剖見る事ハ項
骨七ツ絕骨ハ和蘭人所説のヘイス^{スル}大筋の盡る前
まで骨ハ多^シ也如此類參^ス之發數滿在也此辟漢人

予説人と思ひて滑伯仁張景岳脊骨の説の如く云ふ
す。右眼何きの國とも人身の智と體不肖と差別
なく一脉同ノれます。右眼不肖の事各自又以
遠一亦先と新奇の説を唱ひ何を是か。此を詰
め難け。千古相定不ア。之を疑ふ所生の事ア。右眼
是等を以て考へ得。漢人所謂の上より尋探リテ
アラウコト定めル。之とあえヘアレハ。右眼本元の經脈骨
度。右眼ある。唐の醫書。其説其論。不仕合。是迄
左の書抄する。右眼又付。彼建立。且日本流

外科取建之事。相び。何乎。平和蘭西流の醫道建
立。併々急度。存主。左眼。景岳。醫道の根元。右の
書。右。翻譯。相初。右。後。又。此。上。同。志。し。矣。右。合。逐。政
多配一書。右。政。翻譯。以。之。は。右。前。系。ド。ト。リ。ト
ス。テ。ル。外科書。翻譯。以。之。可。申。ト。近。頃。左。筆。以。操。ニ。ホ
平外醫方藥物等も。段。と。手。掛。ク。心。願。少。存
乍。去。私。儀。當。本。四。十一。歳。ト。ノ。羅。成。殊。近。來。眼。病。數
度。相。煩。眼。力。と。薄。と。相。成。少。中。生。涯。ハ。大。業。遂。シ。ト
す。年。免。宋。キ。モ。保。同。志。し。内。桂。川。活。眼。の。醫。令。息。并。右。

サトニヨン麻林モ年暮リモ前數年モ以後モ和蘭流
醫術成熟可仕也

和蘭船衆來シ多ハ世の諸事ハ馬奴船脚の類
ナシテ一ノノハシケレドモ雇用の醫者ノリ前得ト
上ニハ中シ多キアラシヒノリ。而ニ審御むトモ浮山
ナガニモ彼の國風俗ヲ外國へ通セリ。少一仕由
即國王ナリミ紫衣シ出リ。小商舶ナガ此方ヘ集ム
カニタシトヨル者掠文易ハ總管の官人ナリ。其中ニ貴奴
公ナモ年少アリ。アリヤリ正保の頃ニ年アリカスハル

トヨリ醫者杯モ上ニモアモヘ彼國の書ヨモ評判有
テ前件數條老先生ニ演不審ゆ。演深切。所
奉驚。而ナシ不候。從来の在念自負の。近モ不顧恩召
トヨリ。詠ニ書。不盡言。と。やら何卒。而會仕。又ト同
志。者。ナガ尊仕。此趣。宣教。ナガ。傳。ナガ。達。ナガ。堅
安永二年正月

和蘭醫事問答卷之上

和蘭醫事問答卷之二

問書

東深惠竟承得奉。呈一柬。水深海勇健。成
鴻業。亦可也。但恐後於氣而名闇。有軒上附屬。依
多。多疑。錄之一冊。子幸瀆。大先生之靈。矚承。每
條款密。鴻義。海。下殊。之。脚。翻。傳。細。體。卦。書
之。內。約。國。領。恩。賜。始。初。見。奉。驚。入。承。玉。易。老。耄。

情深滿憐憐。家業政才陰陽競。
寧中滿丁寧成滿。未滿。家空滿。未
研。披滿。多。以。天。承。如。津。以。滿。九。筆。頭。藉。盡。
厚。自。你。早。已。滿。總。可。上。多。之。又。至。來。之。殊。官。
主。滿。指。發。滿。自。家。接。眾。第。滿。宮。也。不。及。吸。
於。又。深。愁。少。寫。之。顧。滿。煩。勞。左。也。出。家。滿。在。唐。
志。又。深。愁。少。寫。之。顧。滿。煩。勞。左。也。出。家。滿。在。唐。

享保年中。拙老弱年。以。考。家。業。出。府。諸。乃。幼。
和。商。醫。書。桂。川。柳。滿。家。之。而。研。持。立。成。以。舉。名。你。乃。

志。又。深。愁。少。寫。之。顧。滿。煩。勞。左。也。出。家。滿。在。唐。

何。率。滿。句。一。爲。李。右。書。ね。之。仕。度。紹。み。と。滿。門。人。竟。返。
相。向。い。要。其。而。未。入。伊。子。滿。取。石。成。山。由。引。御。世。十。山。
他。よ。絕。了。す。ま。ま。志。得。居。既。、數。十。部。御。免。
該。其。い。由。而。德。能。義。之。出。左。殺。世。上。惡。愛。有。之。書。歌。
之。多。近。而。存。、真。之。田。舍。爲。是。一。生。善。展。之。而。而。存。
滿。紙。上。方。始。題。目。計。承。い。も。四。千。錄。篇。之。素。志。を。賞。
修。持。付。歌。

橘。桔。家。之。取。扱。金。瘡。之。書。發。行。、而。是。子。之。作。而。
是。旅。之。事。取。扱。則。伊。子。方。一。相。求。下。而。推。之。為。中。此。

僻遠之地庄の歎嘆事も不知アヨヒノ時井と壁
而のの事は多々有り
和蘭文字ヲ解葉名一折ニ至リテインレモ國語
其を大糞也燒味將も一ツ相成ル像大糞通
曉仕は又漢土醫道周の頃近正安は又世の貧困と
殊ニ内か醫道大衰微のじ外科ハ絶ゆ國中之士安
元を頃より一家飲喫の間も唐人の癖其名を増へ病門
殊如瘧疾の観矩方立也亦仰々無能理其ノが明省
悟感服仕事我病室亦前す至人馬監識を以て日本
之

一流外科通五書立之御芳迹御草稿七八卷
当主之ゆ病門治立を成し、卷首序趣意御久章數
絵圖又署梗概之意付於鴻妙齡より、遺法志毎
季奉驚此書服務于日本和蘭流善之者也率ト不
闇索トあり移るゝ又少版少發行、上竈後此書可
以廢也、相聞而得之先右書お見仕官家内傳多
拙儀也世名、和蘭流不信存其年を頃至諸家秘
本以傳書紙色之年が之傳ト十四五年具ひ文為多
藥油薬付之故存覽は視川五信四、成、源里接錄

源之唐流を建立せんと企て得て之得る事
考究し以て其上を鄙び成りて及ばず至解處
法師も屬する暮半身尊論を通じ唐流の薬性
外治之術也之處が得て内のみ唐流也今移し會
近き方所に先生和蘭の書物覽め成らぬ石窟
里で刑人處刑剖瘍傍睨して得者漢人曰國後大驚異る
和蘭人の研磨毫厘も遠矣之其所以也甚精密なる
付下を以て立教説解體新書海道作也由是
吹浦源氏成て攝撃萬服膺仕波市卷之多
了

眼力あらずか義理入不得て他流も亦存和蘭流もアリ
古今才雙真才太豪傑不待文王不待子雲先生
の筆をあざ笑ひんとする。遂に与共に研磨加え石窟
相呼口呟而不合言舉而卒瞠若す。老眸頻々泣涙仕波
和蘭人日本店來り始て不知二百年前後もアリ也
あらんあらんある今も彼地に醫書數種有るはあら
人す。且つ多數此今源氏翻譯之書有ヘトトト
恒子分等は併せ居次第。拙考億度アラ遠謀
了太先生在アリ老撫主教者有ル。又跋屢忽

越後守の海度が三十年來同業の人の海會
及此海會得を聲唾と類計をもる事無く居
切齒齶痒て死を取る天良節と傳す。幸多也樂
一顧冀此老馬跋蹠長鳴之時を得ゆ。據
千載之一奇遇とする所及鳩摩羅什の如き僅
佛徒も隕滅未始免れ。又羅氏も遼漢土を
不入り日本より修行佛道の繁昌今の事なりと
云ふ考據も和蘭醫術も漢文通す。國も示
焉。亞齊亞の國文ノ國も行滿思澤を蒙る。

者アリ。傳紀石畫と号ひ躬も過仁惠天下の大孝。
奉友以海年齡當四十才より成る咸以由
鄙俗へ詔四十才の三四月以降ヘドハ得
キ。滿射母安生子於斯。滿因志。海方極滿
靈惠過人。春秋三十。滿益少。大業近年
滿成就可と成為。生民之稅仕。老壯為之解麿
濟。仰之屬。大息仕。又此滿。蓋。奉。正。真。和
蘭流外科の家。立本尊有。宗旨。先生。即開
闢。唱道。大祖師也。宗旨の解麿。法師の屬と

施治場所は核行猶可致す老壯多年を
志於相叶ふ堪其苦難雖伎足耳も内景不
得詳従あまく周季を子承あ後も禮物を乞ひ
御返をすめ水戸の辻をさる御湯一洗之上和
蘭ノ名易の緊要なる捷徑を道奇に賜て億兆之國
國億兆ノ生民免夭札壽城ノ人事羅什ニ済此
擬立成歟つもニヨリ法師釋語より計もすまぬ斜
一家ノ祖師トシテシ者も善々直す大意方過し
佛菩薩隨可り所恨也老壯暮景虞側

又春生少六十二歲加多病篤大業始成就存
命終年號伏德碑嘆盡其才御子裕及鴻
博矣可也方將以之爲子之卷本以示文獻

正保年中年少力又ハルトキ醫者ニシテ西國家
禁書ノ同人作有之ナリ少少傳抄也而此傳抄仕取方大
ハル傳抄書とも見テハ至四卷ノ内二卷ハ例も膏
藥油藥二卷ハ病論病證及外科正宗ニ倣テ
病論病門を立人面瘡の療治と云ふ能事内服外洗
等之膏藥油藥を知る施少東升也在也甚矣

向本物に以て被服する者と醫者と口ひどり書一卷正宗又
一脉を付立たる者と名居其頃も通誦。今之吉雄橋林
の子孫は未だしゆ。日本醫の文首歌和蘭之言を述せ
下すとはちくに究す事より漏落す。

萩野氏著述を刊行編和蘭斜訛之要術と文之門は
廢名と書かざれを付其間へ漢名が證ひを重譯頗る
其要難易は漢名外より廢名の悉く卷ある集を號す
名義集と號す。斜訛之要術是易く便利なる。而
れ又シカツアカムルガハクを西書とのミタスナ付譯法也

不存小得を何とす。後序する題名とは存せず漢土の
古法其國に絶筆亦史傳と傳多核は趣有る。器傳金の
況々より奉存假。

金瘡跋撲文書本山一卷致所持は和蘭書と曰
寫。天正年後と聞書エトテるものと申す。序を華名
假名ツとツヌ寄を書さるまえへ申す。字ある音韻ある
トアル。名い老拙名業ラテイシ。國語す其ノナを石知る大
の糞も焼生骨も足可申す。指掌を善め牛乳存る金瘡
の術。又あらむ。筋骨の法もなし。丸内、栗も方とも善き。

昌和蘭醫書を知解する所多矣と存の外
去圖を極く和蘭醫書より言ふを以て何より書の
國より左也や右も書文人身也又之は千四五百
種種々數千萬といふ數不知る程又藻名何物
乎有而下哉海覽也又是為指也以之為面倒直
此書へ漏書入矣がゆか藥名假名の傍と漢名隣多矣
漏真セトテナまざれり

東洋先生刑履を剖らせり藏志を著し又佐野氏
此を諭議して偽辟成論を出されまじか衆人皆之に

著し之れは近來藥選出せり非藥選也一醫乃
生也行醫断き出し山澤も天市の公論より既各私證を
従然也ん考え先づよ諭議ト我意闇諭ノ諭止時々
醫道の亂と存れ況日本を勿論咸周ニ來廢絶く
泻鍼金銷骨々漏用心不慮外乎万方此すの隨分不運
通賢處也斯モ序於何卒不度漏面會齒牛之餘論
辨聽仕度は得此を定め相成多矣残念幸存也惜
哉その年未滿五以解體新書ハ近々漏聞板成也

お足可仕打角お待方既仕取下外科書汚成就近
在命發出而渦出來次第四五枚成在命中お足仕度
念引仕取上及事千萬之餘不覺多想多想不文老
年已成况老造悟作字不堪其他筆走紙上渦
宣渦案可以恐惶謹言

四月九

獨り老杜儀多年世より並和蘭流仕居不学文音
滿腹は故假名交りよお便り者來れど右之際客
怒りをあらへ上

敬啟者。此函為前次所發之信。因未及回。故特此函。答書。乞勿急。小輩恐當一無回音。

舊年衣闋南軒子を相達したまつた以來彌疑まぎ疑なまづき之書のしょを讀よ仕
三刀兩舌さんとうりょうぜつ而相達したまつた由ゑる去はル四月九日くわくそく乃おの詔てう誦よ傳だん
殖時寒冷じきときひんぞう相慕あいなつた得いた食くれ居ゐ處ところ寧やす々やすやす首くび車くるま恐喜おそれうき前
書中しょちゆう多年もんねん過すぎ特とく寒かん儀ぎ一いつ奉感ほうかん心こころ乍乍惱のう彌固志まごむじ莫
存こゝか微意ほいぎ不ふ顧思かたがた石いし門もん之の孫めぐら得いた譽よ誠まことに汗
額かほ伎わざ自じ古こ士しき名めい字じ之の所ところ望まつて千載せんざい之後のち予よ得いた知し
已ま事こと海かい底そこ不ふ石いし佞ねい義ぎ生う涯がい内うち如ご先せん生せい烽ほう期き

遇此事萬古より大幸なり不覺雀躍仕服下レ去厚季
滿賞譽所當レ知也。乃の

前書中レ上後不佞著述外科書滿一覽レ可矣而旨
鑑レ下於得其中レ瀆老先生レ電覽レ以承なる事レ之
無く度に誠ニ覆醫レ之書殊レ未定レ著述レ之レ而
此卷レ御用捨レ也下レ候レ四月六日

萩野氏著述刺絡編和蘭針法要術レ四卷レ得其
蜜名レ記レかまど付其レ漢名を近レ重譯煩レ
思石レ由漢名什レ蜜名レ悉レ卷末レ集め勘定名

義集レ此致致レ可宣与滿也。幸存レ併名俟此度
之解體新書レ也。未レ夫仕於得其多く漢人未曉者御
座レ以故右レ書第一爲肝要レ者計集レ篇滿之舊其
篇レ半蜜名レ唐音書レ之序假名レ付レ而存寄レ滿
存是レ不及運レ之レ唐返レ渡汲レ其節レ之爲
其外レ存唐音書レ付レ日本人レ達せレ假名レ可也。有
譯語レ傳すレ大抵譯レ對譯義譯直譯レ二通レ傳
辟言レ骨の事レと蜜語レアシテヒレトレ小直レ當レ以_レ骨譯

ナム又カラトカヒトモアカニシマシテ鰐のあから骨の事
脆軟す。骨肉解此カラカタモア言葉カツコトケル
ナムト噶ル者ノ所ナキ事トドケル鰐ノモ骨の事ナム
漢語軟骨トヨリ字源本ハ軟骨也。義譯仕テ又飮食
腸胃入其精氣化ヒ液汁也。威此液汁逐語可當暑
無端有矣。直譯仕奇體と譯也。又秋野氏方ノテ
カルアラクシ西書のみ。被髮淡然する。足多骨也。股
主筋也。是假名の遠ヨミガタカカルアラクシモ。而有假
シカヒヤハシマシナ。事カラヒニモ室の事グリとは書乃

事寶藏書古茂可ナ事ナミ。漏れぬ右シカツカラヒニガリ
中四百拾式葉又利佐ト説。漏為考合處。萩野氏著
著。此意味。太邊ヒト。此書。ト譯。ト石奉存。林
萩野氏の傳。不傳。存寄。書。寶書。ト。並。ト。各。存
後。漏。同。卷。ト。金。書。ト。後。大。本。前。書。ト。
金瘡跌撲。書。御家藏。由。御堂。至。一覽。仕。水
アレトヤ。和蘭書。和解。御。藏。金瘡。術。身。也。也。
總。骨。の。法。也。也。也。也。也。也。也。也。

全書より其術具の滑皮右々書ハ右書也言葉も右解
解其上此書和解之時代近きる多金瘡和蘭の事聞
不ノレシが故ニ金瘡乃部計少く解ゆるゝあらず出云
彼書之圖以用シ「セイユ」を大切事より取次界
近見當りるゆゑも後又御在御夫が前書中右和解併
其筋脩不俟アリモ取所要御度既今ノ和蘭書和解と
跡アリム者アリテ右モ主として御度既且藥名等の
傷口瘡名の事ハ妻トアシル蒙詧仰於易アシ書ル亦
通如意ありム所也右書之圖也連ニ十二三を解かセ用シ

右事ハ御名古右今勢滿行アリサ左下水藥名切能ハ逐ニ吟
味仕役存念シ雲深乃おかり御外自是アリ若
右々書中「セイユ」とアシテ七十四有リ孫孫、歲千萬リ少數不
ヒ強直ト所瘡名何事ト物も相あリハ哉ト御身也アリ全株和蘭
人所治の經脈へ直見ムる定ム事也漢人所立トハキム達
十二經の十四經の事也アリ去年中アリ算都御國より
諸体運動脉血脉筋神経と互通スリ外乎ト左也右也
神経と譯トヤシモ蘭語「セイユ」トナム御家義も書
セイユ」トナム此セイユ」トナム御家義も書

すうよ、動血二脉の血頭より外り、臍肉より作る靈液とて、ま
周身より布はれ本源より、而も上から次第相がり、不アレ先
動脈より相辨る御如アレ、動脈の蘭語〔スラクアーテ〕
コアリ、其を心脈より生て、遍身各配付即テ、中其
支末近巻の循り従は血道より、又其を又乃
み左動脈の血頭より原の心、肝、脾、肺、血道、筋
骨等と蘭語〔ホルニア、デル〕と曰く、即血脉と伴体物類と
申す。此二脉運行往還の途徑路及支別の條目、又所在
錯綜如識誠、絲瓜の象の如き、清之は其微袖のとよ

もすら、目之所及、毫毛の壁、微く指を切る血の出る所
紙を拭ふ如針眼所見得る是甚ニ脉微細の所なり、又
動脈心より出るより少いの際、な、流利には止血が何等の所
哉か、又、動有え其皮表近き所、率々上を除いて、其動
知能キル是即漢人所說動脈三部の類す、又、蘭語〔スラクアーテ〕
のアーテルも脉の事〔スチク〕、ハ脉のことをヤクの意、油在てが
唐の字をかり直す動脈と云ふ也、又血脉と云ふ右、左
通動脈する微細の所、此脉の微少の所より更に傳へる、又
脉の表、所見の浮游にて、浮人青脉す、即ち物、ナム

利筋ははおと木綿を卷く事多在下より上ひ豈る深
絞却り外是之物の心按也動脈は裏を被き血脉を
表と還リナレ此還リ行イ「ホセアデル」一名「ブルードアデル」
「ブルート」とは血の事故血脉と解リナム此血脉又ガラツア
スリトスチヤム如箇筆者管中取て懸者ニシテ脉瓣と
謂ト此脉瓣御多シ故血行無ニシテ脉道と
復モ逆行シトヤナムが流动矣シ此血其初メ動脈中
度一房を養ひ終リ帰ヘナム血も濁血の術ハ此脉モ施
レシ和蘭書ニ血有鉢の人を「ブルードレ」ナムアリ其有鉢

血ありテ病を生ムシムシ此脉より其血を除キヤレ術の
名を「アドルト」又「ブルードラ」テ_トナム是ニシテ脉内
するの要法ナム人ナヒテ平和なシ術也在シ此脉の其用
脉の血が濁シ去シム害無シ往々之名血脉の名ナシ脉也此
等のめことニシテ又和蘭脉説、又ニ有鉢の血脉中
充溢シテ動脈の血ゆとり傷へ進事ナシに依ク脉絕
卒例は症有ミト論及在シ是等の血脉を濁シム也
動脈進ムが為生仕取事ナシ在シ此方ヨリ俗ナム卒步
肩の類紫脛脚濁シム治ムト同ジ理ナシ脉也此動

血ニ脉乃ち幹を腹底より上りて脊骨に沿ひ連心
後其大幹より兩傍に横。兩臂は通じ脈管を通す。此管
より兩臂の血を送る傍と其血水中の鹹水を隔てて分利
して滌澄小水生ず。山血の内にも水を交り運行する
其水所も要用ひ無ひや又其部分機も少く。然有
之其血中の水を有利に各部の用を司り。此機を況よす物
其状覆盆子の如く又、蜜柑の皮膜を去り如く。或つて
以し色り淡黄す。わざひまほ漢人のあ、說者より蘭說より
此形狀をスボーテウスアカナコと有名。スボーテウスは海産

本草家多玲瓏硝を充るもの也知名冰吸或海綿と曰ふ
少度の貴邦方言何とぞ哉少供の多賢アリアクチフニヤ
語に意一抄々妄文山海を此取て、標の字の通り即海
綿孫と申奉奉海綿の狀候此標ナリル火似陰岐物國之
所在有りて水血分利を主ひ辟言ハ皮下小有心汗を分
利ト食通スる飲食を傳送する液を察し胃
通スる是と謂和杯は水類之を所シを其用を以て
血中より水あるに投も試み血と紙を交へて其清を血を
漱り水を取る事アリ小臂を二種の機アリの如き

あらる血中の水を有利にして其慈怜なる海石の如き
身のうちの飲食化して血水變成而身をかうし得る
毎日塙ゆけり相承也。小脣脛の傍えを差しの水と海
石の事碑に土器の承をてておもひ得て滂透で墨
跡は残り多溢てトニテアリセ同理にて右の妙海
石ナラ脣脛に傳へ少便々漏れ出る所の血は少
又熱は成る所の血とす。一身が循りし處の動血ニ脉
の血中は有る鹹水薦悟^左ノトメ肌表玉ハ第次
皮ニ附さつて機を覗する者有利にて勝理。汗とは

出りやは即小あゝ感りやみと曰ふるシ度支が太暑中を
许多せ時も小便少しくて是の血中の鹹水皮表より
亦古傳せひをとては山あく涙嚙。咸い水と後汗と鹹く
ト。且莫もまわあ蒙度身^{イヌ}と前^{サヒ}セイニ^ウの
乃^シ後^ミ右^カ動^カ血^ニ脉^アま^ア直^カ頭^ニ連^リ右^カ血^道
のナ^アミ^トテ^シ左^イセイ^テリ^ケブ^アセム^スト^アテ^シ左^イセイ^テ
ク^シナ^リあ例^トサ^シキ^アキ^シカ^レセム^スト^アはえ^ア
津^シ又^シ之^シ意^リ左^シ右^シ上^シ下^シ筋^シ會^シ意^シ
仕^シ筋^シ左^シ右^シ深^シ汗^シ後^シ項^シ頭^シ骨^シ後^シの骨^シ

又循い上方左右せん頂の直縫より左と二筋より裏をも
あまやいほをもと又「ツケルウエイセガトヤシツケル左
イセ」とは纏状より事前頂又循い曲りば纏に似て
其名を以事よそへてある左に纏多と仰ては又と
左の名を「ツケルテアセム」ちやヒー」とは四つもしくは
左右筋を一二とさりとて右縫多と仰ては又
四つめを右と申す「」と云ふ四つの名をとてゆる也
とも甚短れ多が左筋より左縫多と義深仕ゆ

西多の中、各肺辨はてはかく血徐行にしやひ日あとの
脳中の血の動血ニ肺の頭外ひよる。桂血とてはく大抵
「グラカル」より人の説、頭常温る。事如温泉。少半
は血甚緩慢もゆり、「ペイヒアツペギリ」より者連々候
「ペイ」といふ事、「ツペ」とも果の事。従つて「痛果」といふ
是くね子帆述の「まほら」掌中痛果實の「まほら」形似模観
とや本の痛果機器を連び、其機器頭脳の事に在る。動無二脉の
想血より右アヒ「セイニコウホクト」より靈液をか利すしやひ
唐もろ骨液。内行。體海とてゆかとてはく又脳と

九宮八分山の泥丸宮に此ありとせむる事即ちかく那を當
多平の胸竇も一身を寧の根元是を分ひ大經連鼻者二
連眼者六ツ連頭面諸部者二ツ連兩乳者二ツ連耳者二
連腋腑者二ツ連舌者二ツ連皮表者二ツ下りて入脊骨連
兩足腹背者六十總數合ふ半身也爲湯見本末和解
書とは七拾四と云々庶不得を不傷熱論作法外アリトシ
シテ書ヨハ八十之度の和蘭人古一開ヒ有リシ事也度不哉
少々の異因ハ御存此八十の經單ツ左右ノアレ大經子等
其支分細條(身)ニ申セバ布半動血ニ脉微細の者と錯綜

仕沿解體新書第三篇格知篇第二章曰世奴此細神經其色白而強其原自腦與脊出也蓋主視聽言動且知痛痒寒熱使諸不能動者能自在者以有此經故也見于第八篇又同篇第二十章曰世奴和狐都此翻神經計成於胸內也蓋四支百脉神經所行皆得之而能全故名云地爾禮其牙私天此語翻見于第八篇此神經汁也右より之痛果機乎吹之指血之流此汁生而此即胸髓液也其液神經之傳送一升之大經之傳右如く一身の傷よほしよか形のよほし物よほ渴を其妙用焉事唐より神

氣やがかりや物が神經と義擇仕此神經眼ノ外
番の膜より主觀物入耳主聽聲音入舌知五味やれ依
り有疾則失食味口中及食道の下腫半の部分
多端也此極熱物食ひ先舌より熱く咽
中を石炭胸より腰中の中の部分より熱となり在一身
肌膚ハ第二番皮又多くは筋肉それより皮表を寒
熱痛痒を知る又骨を縦の膜又古故刀にて切る事
上の骨の瘡瘍既不外見ねば不離神經と傳
しゆも不苦翁トモナシ委ゆる事ハ第八神經為リ

詳ナリハ筋又は縫のみを取る事無也此筋の用极
止後後あ致來ル甚微細の如是又目的筋よりあらね
の微細の如何とて知難と云不審可有ニ筋の量ハテ告
トトガラストサ草木を見よと見人所候る後よりは其微細の如
如く之筋粗アリトモアリ其微細の如キ又曰眼筋
數六通焉生其筋六番目の眼筋を二倍余
あ厚其脚の筋筋を能ナリシテ筋の筋ニ及キハ也

すが多氣經絡を尊識細の所も於能あり。か胸より
神經の所を事。有生者禽獸を同一事。考之試み
竊するも漏割強覽可也。或は頭より面部七穴敷連
脣より心より鼻林筋と傳説。有之ゆ得也。蘭後主心
より配血の元より胸。神氣之源と云。既に游人の說
乎天谷元神守之自真言人身中上有天谷泥丸藏
神之府也。又頭有九宮中曰泥丸九宮羅列七竅應透
泥丸之宮魂魄之穴也。又真頭痛者其痛上穿風府陷
入泥丸宮不可以藥愈。朝發夕死。夕發朝死。蓋頭中人

妄想根氣先絶也。又腦為體之海。體海有餘則輕勁多
力不足則腦轉耳鳴腔疫眩冒目無所見。又腦者體之
海諸體皆屬於腦。故上自腦下至尾骶皆精體升降之
道路也。すと等數語前よ辨。神經の説と合會
亦然。存治又蘭人中風の説。此病神經因す。漏
管於其運動害焉。或呼之神經の病也。癱瘓
不仁体根漏管之屬。病トオクム。漏管也。速し切可。血也
帶乎血が多不養一身。漏管也。其病ヨリテム。漏管也
か。漏管也。血也。右より通之傷をひし神經也。

病者瘡痔寒熱を多有す是より神經の傷瘡寒
察らば成る彼邦瘡瘍が說之所大畧如此事は豈不
漢人の說乎此神經著の論說より可と後脈為
裏支而橫者為絡絡之別者為孫註證發微曰其支
而橫者即如肺經有列缺橫行手陽明太陽者為絡
也亦如足少陰經等之陽經也而三陰又傳之之
陰經也之の端より起り而事にて推有之若瘡
瘍の際骨より下脱ツ居トモアノ又刀等兩足を切られ
たる人有リムニ陰の筋と之陽の筋を斷き何と云々

一身之内哉脉络ある多名す有之脉を皆何より要く相
交石川い和蘭人の說也動血二脉の大小の支也如絲瓜系
相交り一身絆と名する如リ是が何所を以シヒトモニ(筆
取)傷へ所生之大が一身の血脉循り也得て動脈の大
支も傷の滑り前より通動脈也辨して血を支ひも之
を除き行し血を止める所の俞穴の傷を止血止と傳ひ此
動脈の大支の所と傷の所も之に附且右側の脉を右大
支の通筋透るとも又傍アヒ石接同藩宮崎甚平ヒヤ者
生来三部尺澤等脉應トシテ是より草木の枝根也

督根をうりの筋りである督根丈夫成がふ核と同一事と
動脈の支り細くは骨を脊骨を兼ね其大幹ノ核と成る
石外事とすむ存於彼所説就て自己考付事近取玉
交あ源アキル諸病辨々所宣湯既ある外核を仔細核
倫石審山南之本中江翁知可也少ひ解門以至腰
此度翻譯仕於解體新書之傳是述和蘭書和解未
少見當り少海を急き翻譯也ト事多々近見當り不
少又自我作古業よりする萬事譯法も新製
傳承勿端浮屠氏譯法可有也每少海を呈一向品不詳

手足の筋い對譯義譯直譯と二字に仕ひ多被法傍引
き。又本末又浮字の多き。又碑記唐末之二部人迎等
を動脈と引けし所則右アキル血所往者にて「スラケアーデ
ル」もその動脈と傳へ。且替蘭末やス血所還者と
唐末青脉協と通じて故動脈の脈の案對。前條
アキル血脈と傳へ。又經脈と熟於時。一指
相間。右骨十二經脈を三ツ三つ何經うそく何脈を
いどす「セイニウ」ハ元々一身の最主する者為此動血脉
ある。シテセイニウ。又經の字と下シテシテ唐末之命也

を擰る。又大筋を前後又有り杯と豆腐外大筋は蘭人所造
「アレ」ヤドホシモ「スヒール」と云者之端也此「スヒール」の云物
所謂筋者アラモトモ薄紙ヒテ松邊ヨリ頭腹尾の差
別有シ。東洋先生底志。筋其末肉と成シ筋と焉滅
シ成シ骨を其筋腹之所ハ肉の少ふ文。在ニ冰玉漬シ。而
麻の如モ其筋筋膜可食者。及麻糸元來一物故筋
也。アラ大抵新書を澤是等之麺仕水酒同志之事。
始末ノ事一通ナシ。水酒も是后太湯。及水酒示教

近來非戻志非藥運任醫斷極迄一歩了私說を主張
せん者々先手と詠傍一醫道ヲ乱ト相成る事無也
漏をも極ま存水ぬ淺猿一き世態少見ニ戯目は學
不可記事、漏左腕右脚ノ母風氣解體新書開拓主
衆愚謗、鏢金銷骨ノ用心可仕。漏深切發育等位
仕迎。按歎の人を多可有の處方去一番銘と云ふ
捨玉より覺悟。是の間相成る事は併一人すとも
残付。本望之至漏左腕陳勝之事不成。漏之
高祖。秦の苛政とあはり。其の勝志も立ア。其の家

醫之如方不度看實之病而喝少至千載之得之
改以時節可有之症亦存之計之不外上度事如耕
深之多紙殊盡先治各旁如此活無不恐惶謹言
十月十五日

和蘭醫事問答卷之下

和蘭醫事問答跋

讀序因書

此書也先大人建部先生一時消暑之暇所以
據平素之蓄念也未始意於述作關甫軒觀省
之日書授之居無幾甫軒再遊于東都質諸於
田先生安永癸巳歲得於田先生之答書先大
人之意始豁如鳥是不肖勤髫亂之時所面視
也竟使家兄游于東都受業於於田先生之門
留學數年北歸是時於田先生未舉男子致書
先大人請養不肖勤以為子建部先生以書辭

勤以為子建部先生以書辭

曰豚兒不肖不敢當負荷之任設廢箕裘之業
墜名家聲聞則何以塞不子之責於天敢辭移
田先生又以書請曰記云蛾子時術之若果蛾
子則余之幸也否則余之不幸也幸不幸天也
班今日之所逆覩書徃復者數矣切請不已竟
養不肖勤以為適嗣天明壬寅不肖勤年甫弱
冠冒於田氏爾來侍於先生膝下十餘年矣嫗
覆之恩昊天罔極時術之義責太重矣然稟賦
孱弱加以多疾日夜牀愴惟懼不克負荷其薪

近時先生之業隆行于世從游之後負笈日至
先生輒示以此書令其先知吾業之所以而入
也勤頃恐屢經謄寫之外訛也與太子煥謀上
棗梨以貯于家塾冀省門人謄寫之勞如其論
說則待世之識者矣

寛政甲寅三月

不肖男勤敬識

西官

木田

士業外五



陸奥一關侍醫清庵建部先生

若狭小濱侍醫鷦齋杉田先生

問答

男

若狭小濱醫官

杉田勤士業校正

妻

陸奥一關醫官少衣關敬鱗

伯龍

門人

伊豫松山醫官

安東其馨子蘭輯錄

妻

陸奥仙臺醫官

大楨茂質子煥

妻

陸奥仙臺醫官

多喜負夢和絅

男 女

吉

名

田

久

永

安

良

久

